が、京大の人文科学研究所が文部省の研究助成金をとりまして、それをふまえて、細川史料は全部一旦京都へいった。こういうことでございます。ですから京都の全五巻の第一巻のはしがきの方にちゃんと書いてありますけれども、京都で細川史料を全部一旦預ってしまったために、色々細川史料を使いたい研究者たちが不便を感じただろうと思うと、その点については迷惑をかけたということが一寸書いてあります。その通りでございまして、私共米騒動研究には、いちいち京都の人文科学研究所へ学生が行きまして、必要な部分を借り出してきて、そして細川史料を使ったという経験が何回もございました。

九、京都の研究

それはともかくといたしまして、そういうことで、文部省の助成金をもとにして京大は本格的な研究をやったということで、一九五八年から六二年にかけて全五巻の出版が終ったわけでございます。ところがですね、全五巻をとりまとめたんだがその第一巻総論みたいな部分、それから第五巻の結論みたいな部分が、まあ争点でございますけれども、この中で書かれている米騒動について京都の結論というのは誠に残念だと私共は思うわけでございますが、こうです。片山潜は日本の革命運動、階級闘争、革命闘争の力強い第一歩として米騒動を位置づけているが残念ながら当時、日本のプロレタリアートはそこまでは力量がなかった。そこで小ブルジョアインテリ、象徴的には新聞記者、その他の小ブルジョアインテリが、一定のそういった民主主義を推進していく政治勢力になりうる可能性はあったが、米騒動は革命に結びつくような、――片山潜はあの米騒動時一定の前衛政党があればあの時日本に革命ができたということまで述べているんですが――そういう情勢はなかったというのが京都の結論でございます。

その結論は大変私共にとっては残念で、明らかに間違った結論だと私は思っております。確かに当時前衛政党はなかったわけです。従って自然発生的な闘いであり、米騒動は全体として一定の限界をもっていたとは思いますが、それ以前の大正政変、日比谷焼打事件などと違って既成の政党をのりこえた、或る意味では当時の社会主義者の思考、行動の範囲をのりこえた日本の被支配階級の一番の底辺から起こった闘ですね。これは明らかにそれ以前の大衆闘争と誠に質を異にした闘いであったと思います。さてその中で色々支配階級も学びましたが被支配階級もその中から色々学びとったわけでございまして、つまり組織の必要を痛感してですね、そういう中で日本共産党或は農民組合ができ、或は水平社ができといった一連のことは、日本の被支配階級が米騒動の闘いの中から学んだ一番重要な成果だったろうと思っております。そこに結びつくような結論を、京都の研究が十分に出していないという問題があると思います。

そこで、その他にも京都の研究というのは一つ一つつぶさに見て参りますと、細川史料とのつき合せでいきましても、失礼な言い方をさせていただくとやや適当にピックアップした部分もあります。適当という言い方が失礼であれば、ピックアップの仕方が間違った事実のつかみ出しという様なこともありますし、細かにいえば史料の文字の読み間違いまであるといったようなことで、読み間違った文字を基にして推論をして結論を出しているわけでございます。これは決して完全な米騒動の全貌を明らかにしたものではございません。但し、それにしても概括的に大正七年の米騒動の姿を提起したという点は大変な業績であることは確かでございまして、やはりこれを基にして、これをふまえつつそして細川史料にもどりつつ、更にそして沢山の聞きとり、史料蒐集をつみ重ねて、今後の米騒動の研究が進められる必要があると思います。ところが六二年にこの全五巻が完成してしまいますと、日本の米騒動研究は一頓挫したように研究が停滞をしてしまいました。どうも京都の研究で米騒動は終っちゃったと思われるくらいの事態でございます。実は残念ながら現在もその事態が続いていると思っています。五十周年記念一九六八年の時には、かなり全国的にも色々な研究報告がなされましたが、それ以後はほとんど、米騒動独自の研究というものは行われていないのが現状でございます。ただ京都の研究以後は、その後出されてくる色々な都道府県の県史或は社会運動史などにおいては、ほとんど米騒動について触れられるということが必ずありまして、そういう米騒動について触れ

ないと通史が出来上らないといった事態になっているのが一つの前進でございますけれども、米騒動自体の研究はなかなか進んでいないという風に思うわけでございます。

十、今後への課題

今後の問題点をやや羅列的に申し上げてみたいと思います。一つは米騒動の全体像を明らかにするということになっちゃうとですね、今、京都の松尾さん、井上さんあたりが提起している小ブルジョアジーを中心にした認識の仕方ですね、それから片山潜、細川嘉六さん或は私共の法政大学のグループなども含まれているんですけれども、基本的に米騒動を底辺から規定をしていたのはプロレタリアートの闘いという考え方、この両者の間には論争は続いていませんけれど対立点は現に残っているわけでございます。そこで米騒動の担い手の問題、或は指導の問題といいますか、つまりあの時点における階級闘争の構造全体をどうつかむか――日本全体として――或は階級関係をどうつかむかということは、これは米騒動全体をつかむこととほぼイコールになる大変なことなんですけれども、その点が今後更に究明される必要があろうかと思うわけでございます。

二番目に上げますのは、まさに羅列的なことなんですが、もう一つ米騒動の発端という問題について考えてみる必要があるかと思います。富山県における米騒動は最初である。これはもう誰しも疑う余地の無い事実でございます。しかし米騒動の発端というものを考えると富山だけで考えてよろしいかという問題はあろうかと思うわけでございます。というのは、特に富山の米騒動が全国に波及したというのは、その衝撃力、いろんな行動がありましたけれど一番衝撃力になったのは津留めという行動だったろうと思われます。つまり廉売を要求する施米を求めるということは、働く人々の潔しとする行為では必ずしもございません。そうではなくて、率直に言って当時の米の騰貴をやる元凶は誰だったのか、その騰貴が自分達の生活を如何に追い込んでいるか、ここのところに闘争の過程でですね、米騒動大衆は気がついてくる。これは大変重要な認識、理解の中軸といいますか、階級関係についての認識の飛躍がこの中に、闘争の中で生まれてくる。そこで津留めをやる。つまり米穀商であるとか或はそういった当時の地域の支配権力、これに対して敢然と闘う、お願いするんじゃなくて闘うんですね。これが津留めという行動に出たんだと思います。その当時の支配階級に対してですね、闘ということが衝撃を与えた、これが全国に波及した。みんな闘いたかった。日本人は、それにバーンと衝撃を与えた。そういった理解をしますと、似たような条件に、全国でですね、やや似たような条件にあるところで、相対的にですね、極端に言えば富山のことを知らなくてもと言うことですが――これはやや極端ですが――米騒動が起こったところがあるわけでございます。事実、私が直接調べましたところでいえば、岡山県の中国山脈の中に落合という町がございます。朝日川という川がありまして、その河口は岡山市にでてくるわけです。これは中国山脈の中の米の集散地でございまして、ここでもあの大正七年八月八日の夜、米騒動が起こっている。それから広島県の似たような中国山地で三次というところがあります。これは川が三本流れこんできて、その真中に巴橋がありますが、結局合川になって、その川は日本海の浜田に流れ出すんですけれども、ここも米の集散地で、ここでも八日～九日にかけて米騒動が起こっている。いずれも米を移出することを阻止するという行動に出ている。そういう中国山地でございまして、当時の新聞「山陽新聞」であるとか「中国新聞」など地方紙を、かなり細かく調べましたが岡山の落合、或は広島の三次の米騒動に立ち上った大衆は、もしかしたら富山の米騒動のことを何も知らなかったかもしれないという可能性が依然として残っております。新聞など読む人は当時は少なかったし、ラジオはほとんどいなかったということでございまして、一部の人は知ってたかもしれないけれど、ほとんどの人は、米騒動大衆は知らなかった可能性がある。そういう所でもやはり津留めという行動様式があり、しかもご承知の通り、岡山、広島の米騒動は瀬戸内の大都市部ではかなりの大闘争になるわけですけれど、そういう大都市部の闘争よりも早くですね、米の集散地の積み出し阻止というようなことが早く起こっている。似たようなことは米の集散地でいくつかあるわけで、香

川県とか、いくつかあるわけで、そういうところで総体的な初発というか発端というものがあるわけで、そういう意味では発端の問題はもう少し広く考えてみた場合に、逆に富山の米騒動の位置付けというものは、もっと豊かになるんではないかという気がいたします。

それからこれはもう申し上げるまでもないんですが、この大正七年の米騒動は、それ以前の階級闘争或はそれ以後の階級闘争の関連についてどう考えるかという問題は大事なことでございまして、その際関連とか影響といった時にですね、何か直接米騒動に参加した人が、その後労働組合をつくったとか、共産党員になっているとか、いう風な直接の問題ということは必ずしも必要ない、勿論そういうケースもある。歴史の教訓の学び方、或は歴史の影響の仕方はそう短絡的なものでないんで、私のいろんな聞きとりの中でも、自分は米騒動に参加しなかったんだけれど、その時色々考えさせられた。たとえば埼玉県の水平社を創立した人は、自分はまだ子供で直接その時に参加できなかった。そんじゃあかんと思って水平社をつくったといったような話もありますし、直接の人間でなくてもつまり関連の問題というのは、そういった問題も含むと思います。

更にこれからご報告あると思いますが植民地、或は東アジア全体としてこの日本の米騒動をどう位置付けるかといった問題も重要な研究課題であると思います。

全体として、更にもう現在聞きとり調査といったものは残念ながら出来なくなっていると思いますけれども、また聞きであってもいいし、色々な原体験者、或はそれにごく近い方々から聞きとり或は色々な事実の確認というような事もきちんと進める必要がある。それから史料の所在について一つだけ申し上げますと、全国的に細川史料がかなり詳細に新聞の記事を集めておりますが、やはり当然のことながら色々洩れがある。そういう意味では全国的に地方誌、或は、地方版についてもこの当時のものを、それを集めておりますのは東大に明治期新聞、雑誌文献が系統的でありますが、これをきちんとそれぞれ追求していく中で細川史料を充実していくことができる報道がみつけ出されておりますし、現に見付け出しておりますし、今後もまだまだ開発できるんじゃないかと思っております。

大変長時間申し上げましたが、私自身もまだまだこれから米騒動を研究していかなくちゃなりませんし、できれば、大変な全国的なことでございまして、まだまだ広範な、沢山な力が寄せ集められる必要がある研究だろうと思っています。この研究会が、そのような方向にむかって実りある前進をするように私も努力をしていきたいと思っております。長時間有難うございました。

（一九八三年五月八日創立研究会における講演。事務局にて小節見出しを付す。）

引用文献の詳細は次のリストに見られる。

「一九一八年の『米騒動』にかんする文献」法政大学米騒動研究会、労働運動史研究四九号（一九六八年十二月）掲載

一九八四年度研究総会報告

十月十三・四日、新潟県教職員組合「市教組会館」にて、歴史教育者協議会新潟支部と共催、出席者四四名、

佐藤誠朗「民衆史と歴史教育」、渡引礼子「近世越後の米騒動」、歴教協新潟支部（斉藤剛報告）「新潟市民衆の歴史」、井本三夫「米騒動の理論的諸問題と新潟近代の米騒動」

一九八四年度富山支部活動報告

四月一日午後、富山市立図書館六階講義室で公開講座（非会員五名を含み出席二〇名）

高瀬保　「射水郡下村の慣行小作権」を聴き、その貴重な内容を中心に討論。

六月十日、滑川文化センターで「幕末維新期の米騒動とばんどり騒動」の研究会を行い（参加者二〇名）、

岩倉政治「安政五年の井波騒動」

金子忠雄「明治二年の滑川米騒動」

の講演に続いて、同じ明治二年の「ばんどり騒動」について